

「夏はプール」は日本独特

保育園にプールがあるということは世界的に見れば珍しいことだそうです。おそらく日本の学校にプールがあるので、その影響を受けて「夏はプール」というのが常識かのようになっていますが、この意識は少し修正しておきたいところがあります。それは「今日はプールに入れて良かったね、入れなくて残念だったね」という考えです。つい、私たちもそんな感覚になりがちですが、夏の涼のとり方の一つが「水遊び」であり、そのうちの一つが「プールの中での水遊び」なのです。

その一方で「泳ぎ方」を教えたりすることは、保育のねらいにはなっていません。それよりも、全身で水と親しむことを通じて、「水は滑りやすい」とか「顔に水がかかっても平気になる」とか「溺れないように泳ぐ」とか、安全な方法を自らの体験を通して学ぶことを大切にします。水と仲良くなり、「水との付き合いが楽しくなる」ことが一番です。そのためには、「プールに入る」ということは、その一部分でしかないのです。

日本は四季に恵まれており、日本人は自然環境を生活の中に上手く取り入れてきました。保育の世界でも同じです。保育所保育指針の環境の領域には「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」とあります。自然の恵みや文化の知恵を自らの体験を通して学んでもらいたいのです。他にも指針の健康の領域には「自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う」とありますので、暑い夏には汗をかいて体温を下げることができる健康な身体を育みたいですし、自分から水分を補給する習慣も身につけさせてあげたいと願っています。

ジメジメして湿気の多い日本の夏は、通りに打ち水をして気化熱で地面の温度を下げ、風通しの良い間取りにして外気を取り入れ、日が差す場所にはよしずやつる植物の葉で日陰をつくり、風鈴の音色が涼し気な風情を演出していました。また食べ物もそうめんや冷麦など、口当たりの良い食感など工夫を凝らしてきました。

こういった工夫の一つが「水遊び」なのです。なので、保育園での夏の水遊びは「水と親しくなること」や持続可能な社会づくりとしての「涼のとり方」を大切にしています。毎日プールに入ることを目指しているものではありません。プールに入らない日があったり、子どもによってはプール遊びを選ばないこともありえます。「涼のとり方」を幅広くとらえていますので、ご理解のほど宜しくお願い致します。

ながさわ保育園
園長 中瀬弦偉

